



RIP の設定

- [RIP 情報 \(1 ページ\)](#)
- [RIP の設定方法 \(2 ページ\)](#)
- [例 : IPv6 用の RIP の設定 \(12 ページ\)](#)
- [サマリーアドレスおよびスプリット ホライズンの設定例 \(12 ページ\)](#)
- [Routing Information Protocol に関する機能情報 \(12 ページ\)](#)

RIP 情報

RIP は、小規模な同種ネットワーク間で使用するために作成された Interior Gateway Protocol (IGP) です。RIP は、ブロードキャストユーザデータグラムプロトコル (UDP) データパケットを使用してルーティング情報を交換するディスタンスベクトルルーティングプロトコルです。このプロトコルは RFC 1058 に文書化されています。RIP の詳細については、『*IP Routing Fundamentals*』（Cisco Press 刊）を参照してください。



(注) RIP は Network Essentials 機能セットでサポートされています。

スイッチは RIP を使用し、30 秒ごとにルーティング情報アップデート (アドバタイズメント) を送信します。180 秒以上を経過しても別のルータからアップデートがルータに届かない場合、該当するルータから送られたルートは使用不能としてマークされます。240 秒後もまだ更新がない場合、ルータは更新のないルータのルーティングテーブルエントリをすべて削除します。

RIP では、各ルートの値を評価するためにホップカウントが使用されます。ホップカウントは、ルート内で経由されるルータ数です。直接接続されているネットワークのホップカウントは 0 です。ホップカウントが 16 のネットワークに到達できません。このように範囲 (0 ~ 15) が狭いため、RIP は大規模ネットワークには適していません。

ルータにデフォルトのネットワークパスが設定されている場合、RIP はルータを疑似ネットワーク 0.0.0.0 にリンクするルートをアドバタイズします。0.0.0.0 ネットワークは存在しません。RIP はデフォルトのルーティング機能を実行するためのネットワークとして、このネットワークを処理します。デフォルトネットワークが RIP によって取得された場合、またはルータが最終ゲートウェイで、RIP がデフォルトメトリックによって設定されている場合、スイッ

チはデフォルトネットワークをアドバタイズします。RIPは指定されたネットワーク内のインターフェイスにアップデートを送信します。インターフェイスのネットワークを指定しなければ、RIP のアップデート中にアドバタイズされません。

RIP for IPv6

IPv6 の Routing Information Protocol (RIP) は、ルーティング メトリックとしてホップ カウントを使用するディスタンスベクトルプロトコルです。IPv6 アドレスおよびプレフィックスのサポート、すべての RIP ルータを含むマルチキャスト グループ アドレス FF02::9 を RIP アップデート メッセージの宛先アドレスとして使用する機能などがあります。

IPv6 の RIP の設定については、「IPv6 の RIP の設定」を参照してください。

IPv6 の RIP の詳細については、Cisco.com で『Cisco IOS IPv6 Configuration Library』の「Implementing RIP for IPv6」の章を参照してください。

サマリー アドレスおよびスプリット ホライズン

ブロードキャストタイプの IP ネットワークに接続され、ディスタンスベクトルルーティングプロトコルを使用するルータでは、通常ルーティングループの発生を抑えるために、スプリット ホライズン メカニズムが使用されます。スプリット ホライズンは、ルートに関する情報の発信元であるインターフェイス上の、ルータによって、その情報がアドバタイズされないようにします。この機能を使用すると、通常の場合は複数のルータ間通信が最適化されます（特にリンクが壊れている場合）。

RIP の設定方法

RIP のデフォルト設定

表 1: RIP のデフォルト設定

機能	デフォルト設定
自動サマリー	イネーブル。
デフォルト情報送信元	ディセーブル。
デフォルト メトリック	自動メトリック変換（組み込み）
IP RIP 認証キーチェーン	認証なし 認証モード：クリア テキスト
IP RIP の起動	無効
IP スプリット ホライズン	メディアにより異なる

機能	デフォルト設定
Neighbor	未定義
ネットワーク	指定なし
オフセットリスト	ディセーブル。
出力遅延	0 ミリ秒
タイマー基準	<ul style="list-style-type: none"> • 更新 : 30 秒 • 無効 : 180 秒 • ホールドダウン : 180 秒 • フラッシュ : 240 秒
アップデート送信元の検証	イネーブル。
バージョン	RIP バージョン 1 およびバージョン 2 パケットを受信し、バージョン 1 を送信します。

基本的な RIP パラメータの設定

RIP を設定するには、ネットワークに対して RIP ルーティングを有効にします。他のパラメータを設定することもできます。スイッチでは、ネットワーク番号を設定するまで RIP コンフィギュレーション コマンドは無視されます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例 : Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> • プロンプトが表示されたらパスワードを入力します。
ステップ 2	configure terminal 例 : Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	ip routing 例 : Device (config)# ip routing	IP ルーティングを有効にします。(IP ルーティングが無効になっている場合だけ、必須です)。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 4	router rip 例 : Device(config)# router rip	RIP ルーティング プロセスを有効にし、ルータ コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 5	network network number 例 : Device(config-router)# network 12.0.0.0	ネットワークを RIP ルーティング プロセスと関連付けます。複数の network コマンドを指定できます。RIP ルーティング アップデートの送受信は、これらのネットワークのインターフェイスを経由する場合だけ可能です。 (注) RIP コマンドを有効にするには、ネットワーク番号を設定する必要があります。
ステップ 6	neighbor ip-address 例 : Device(config-router)# neighbor 10.2.5.1	(任意) ルーティング情報を交換する隣接ルータを定義します。このステップを使用すると、RIP (通常はブロードキャストプロトコル) からのルーティングアップデートが非ブロードキャストネットワークに到達するようになります。
ステップ 7	offset-list [access-list number name] {in out} offset [type number] 例 : Device(config-router)# offset-list 103 in 10	(任意) オフセットリストをルーティングメトリックに適用し、RIPによって取得したルートへの着信および発信メトリックを増加します。アクセスリストまたはインターフェイスを使用し、オフセットリストを制限できます。
ステップ 8	timers basic update invalid holddown flush 例 : Device(config-router)# timers basic 45 360 400 300	(任意) ルーティング プロトコル タイマーを調整します。すべてのタイマーの有効範囲は 0 ~ 4294967295 秒です。 <ul style="list-style-type: none"> • update : ルーティング アップデートの送信間隔。デフォルトは 30 秒です。 • invalid : ルートが無効と宣言されるまでの時間。デフォルト値は 180 秒です。 • holddown : ルートがルーティング テーブルから削除されるまでの時間。デフォルト値は 180 秒です。 • flush : ルーティング アップデートが延期される時間。デフォルトは 240 秒です。
ステップ 9	version {1 2} 例 :	(任意) RIP バージョン 1 または RIP バージョン 2 のパケットだけを送受信するようにスイッチを設定

	コマンドまたはアクション	目的
	Device(config-router)# version 2	します。デフォルトの場合、スイッチではバージョン1および2を受信しますが、バージョン1だけを送信します。インターフェイスコマンド ip rip {send receive} version 1 2 1 2 を使用して、インターフェイスでの送受信に使用するバージョンを制御することもできます。
ステップ 10	no auto summary 例： Device(config-router)# no auto summary	(任意) 自動要約を無効にします。デフォルトでは、クラスフルネットワーク境界を通過するときサブプレフィックスがサマライズされます。サマライズを無効にし (RIP バージョン2だけ)、クラスフルネットワーク境界にサブネットおよびホストルーティング情報をアドバタイズします。
ステップ 11	output-delay delay 例： Device(config-router)# output-delay 8	(任意) 送信する RIP アップデートにパケット間遅延を追加します。デフォルトでは、複数のパケットからなる RIP アップデートのパケットに、パケット間遅延が追加されません。パケットを低速なデバイスに送信する場合は、8 ~ 50 ミリ秒のパケット間遅延を追加できます。
ステップ 12	end 例： Device(config-router)# end	特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 13	show ip protocols 例： Device# show ip protocols	入力を確認します。
ステップ 14	copy running-config startup-config 例： Device# copy running-config startup-config	(任意) コンフィギュレーションファイルに設定を保存します。

RIP 認証の設定

RIP バージョン 1 は認証をサポートしていません。RIP バージョン 2 のパケットを送受信する場合は、インターフェイスで RIP 認証を有効にできます。インターフェイスで使用できる一連のキーは、キーチェーンによって指定されます。キーチェーンが設定されていないと、デフォルトの場合でも認証は実行されません。

RIP 認証が有効であるインターフェイスでは、プレーンテキストと MD5 という 2 つの認証モードがサポートされています。デフォルトはプレーンテキストです。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none">パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	interface interface-id 例： Device(config)# interface gigabitethernet 1/0/1	インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始し、設定するインターフェイスを指定します。
ステップ 4	ip rip authentication key-chain name-of-chain 例： Device(config-if)# ip rip authentication key-chain trees	RIP 認証を有効にします。
ステップ 5	ip rip authentication mode {text md5} 例： Device(config-if)# ip rip authentication mode md5	プレーンテキスト認証（デフォルト）または MD5 ダイジェスト認証を使用するように、インターフェイスを設定します。
ステップ 6	end 例： Device(config)# end	特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 7	show running-config 例： Device# show running-config	入力を確認します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 8	copy running-config startup-config 例 : Device# copy running-config startup-config	(任意) コンフィギュレーションファイルに設定を保存します。

IPv6 RIP の設定

IPv6 の RIP ルーティングの設定の詳細については、Cisco.com で『*Cisco IOS IPv6 Configuration Library*』の「Implementing RIP for IPv6」の章を参照してください。

IPv6 の RIP ルーティングを設定するには、次の手順を実行します。

始める前に

IPv6 RIP を実行するようにスイッチを設定する前に、グローバルコンフィギュレーションモードで **ip routing** コマンドを使用してルーティングを有効にし、グローバルコンフィギュレーションモードで **ipv6 unicast-routing** コマンドを使用して IPv6 パケットの転送を有効にして、IPv6 RIP を有効にするレイヤ 3 インターフェイス上で IPv6 を有効にする必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例 : Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 パスワードを入力します (要求された場合)。
ステップ 2	configure terminal 例 : Device# configure terminal	グローバルコンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 3	ipv6 router rip name 例 : Device(config)# ipv6 router rip cisco	IPv6 RIP ルーティングプロセスを設定し、このプロセスに対してルータコンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 4	maximum-paths number-paths 例 : Device(config-router)# maximum-paths 6	(任意) IPv6 RIP がサポートできる等コストルートの最大数を定義します。指定できる範囲は 1 ~ 32 で、デフォルトは 16 ルートです。
ステップ 5	exit 例 : Device(config-router)# exit	グローバルコンフィギュレーションモードに戻ります。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 6	interface interface-id 例 : Device(config)# interface gigabitethernet 1/0/1	インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始し、設定するレイヤ3インターフェイスを指定します。
ステップ 7	ipv6 rip name enable 例 : Device(config-if)# ipv6 rip cisco enable	指定された IPv6 RIP ルーティングプロセスをインターフェイス上で有効にします。
ステップ 8	ipv6 rip name default-information {only originate} 例 : Device(config-if)# ipv6 rip cisco default-information only	<p>(任意) IPv6 デフォルトルート (:::0) を RIP ルーティングプロセスアップデートに格納して、指定インターフェイスから送信します。</p> <p>(注) 任意のインターフェイスから IPv6 デフォルトルート (:::0) を送信したあとに、ルーティンググループが発生しないようにするために、ルーティングプロセスは任意のインターフェイスで受信したすべてのデフォルトルートを無視します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • only : このインターフェイスから送信するアップデートに、デフォルトルートを格納し、その他のすべてのルートを含めない場合に選択します。 • originate : このインターフェイスから送信するアップデートに、デフォルトルートおよびその他のすべてのルートを格納する場合に選択します。
ステップ 9	end 例 : Device(config)# end	特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 10	次のいずれかを使用します。 <ul style="list-style-type: none"> • show ipv6 rip [name] [interface interface-id] [database] [next-hops] • show ipv6 rip 例 : Device# show ipv6 rip cisco interface gigabitethernet 2/0/1 または Device# show ipv6 rip	<ul style="list-style-type: none"> • 現在の IPv6 RIP プロセスに関する情報を表示します。 • IPv6 ルーティング テーブルの現在の内容を表示します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 11	copy running-config startup-config 例： Device# copy running-config startup-config	(任意) コンフィギュレーションファイルに設定を保存します。

サマリーアドレスおよびスプリットホライズンの設定



- (注) ルートを適切にアドバタイズするため、アプリケーションがスプリットホライズンを無効にする必要がある場合を除き、通常はこの機能を無効にしないでください。

ダイヤルアップクライアント用のネットワークアクセスサーバーで、サマライズされたローカルIPアドレスプールをアドバタイズするように、RIPが動作しているインターフェイスを設定する場合は、**ip summary-address rip** インターフェイス コンフィギュレーションコマンドを使用します。



- (注) スプリットホライズンが有効の場合、自動サマリーとインターフェイスIPサマリーアドレスはともにアドバタイズされません。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> パスワードを入力します (要求された場合)。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	interface interface-id 例： Device(config)# interface gigabitethernet 1/0/1	インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始し、設定するレイヤ 3 インターフェイスを指定します。
ステップ 4	ip address ip-address subnet-mask 例：	IP アドレスおよび IP サブネットを設定します。

	コマンドまたはアクション	目的
	Device(config-if)# ip address 10.1.1.10 255.255.255.0	
ステップ 5	ip summary-address rip ip address ip-network mask 例 : Device(config-if)# ip summary-address rip ip address 10.1.1.30 255.255.255.0	サマライズする IP アドレスおよび IP ネットワークマスクを設定します。
ステップ 6	no ip split horizon 例 : Device(config-if)# no ip split horizon	インターフェイスでスプリットホライズンを無効にします。
ステップ 7	end 例 : Device(config)# end	特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 8	show ip interface interface-id 例 : Device# show ip interface gigabitethernet 1/0/1	入力を確認します。
ステップ 9	copy running-config startup-config 例 : Device# copy running-config startup-config	(任意) コンフィギュレーションファイルに設定を保存します。

スプリットホライズンの設定

ブロードキャストタイプの IP ネットワークに接続され、ディスタンスベクトルルーティングプロトコルを使用するルータでは、通常ルーティングループの発生を抑えるために、スプリットホライズンメカニズムが使用されます。スプリットホライズンは、ルートに関する情報の発信元であるインターフェイス上の、ルータによって、その情報がアドバタイズされないようにします。この機能を使用すると、複数のルータ間通信が最適化されます（特にリンクが壊れている場合）。



(注) ルートを適切にアドバタイズするために、アプリケーションがスプリットホライズンを無効にする必要がある場合を除き、通常この機能を無効にしないでください。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device> enable	特権 EXEC モードを有効にします。 パスワードを入力します（要求された場合）。
ステップ 2	configure terminal 例： Device# configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	interface interface-id 例： Device(config)# interface gigabitethernet 1/0/1	インターフェイス コンフィギュレーション モードを開始し、設定するインターフェイスを指定します。
ステップ 4	ip address ip-address subnet-mask 例： Device(config-if)# ip address 10.1.1.10 255.255.255.0	IP アドレスおよび IP サブネットを設定します。
ステップ 5	no ip split-horizon 例： Device(config-if)# no ip split-horizon	インターフェイスでスプリット ホライズンを無効にします。
ステップ 6	end 例： Device(config)# end	特権 EXEC モードに戻ります。
ステップ 7	show ip interface interface-id 例： Device# show ip interface gigabitethernet 1/0/1	入力を確認します。
ステップ 8	copy running-config startup-config 例： Device# copy running-config startup-config	（任意）コンフィギュレーションファイルに設定を保存します。

例 : IPv6 用の RIP の設定

次に、最大 8 の等コストルートにより RIP ルーティングプロセス *cisco* を有効にし、インターフェイス上でこれを有効にする例を示します。

```
Device> enable
Device# configure terminal
Device(config)# ipv6 router rip cisco
Device(config-router)# maximum-paths 8
Device(config)# exit
Device(config)# interface gigabitethernet2/0/11
Device(config-if)# ipv6 rip cisco enable
```

サマリーアドレスおよびスプリットホライズンの設定例

次の例では、主要ネットは 10.0.0.0 です。自動サマリーアドレス 10.0.0.0 はサマリーアドレス 10.2.0.0 によって上書きされるため、10.2.0.0 はインターフェイスギガビットイーサネットポート 2 からアドバタイズされますが、10.0.0.0 はアドバタイズされません。この例では、インターフェイスがレイヤ 2 モード (デフォルト) の場合は、**no switchport** インターフェイスコンフィギュレーションコマンドを入力してから、**ip address** インターフェイスコンフィギュレーションコマンドを入力する必要があります。



- (注) スプリットホライズンが有効である場合、(**ip summary-address rip** ルータ コンフィギュレーションコマンドによって設定される) 自動サマリーとインターフェイス サマリーアドレスはともにアドバタイズされません。

```
Device(config)# router rip
Device(config-router)# interface gigabitethernet1/0/2
Device(config-if)# ip address 10.1.5.1 255.255.255.0
Device(config-if)# ip summary-address rip 10.2.0.0 255.255.0.0
Device(config-if)# no ip split-horizon
Device(config-if)# exit
Device(config)# router rip
Device(config-router)# network 10.0.0.0
Device(config-router)# neighbor 2.2.2.2 peer-group mygroup
Device(config-router)# end
```

Routing Information Protocol に関する機能情報

表 2: *Routing Information Protocol* に関する機能情報

リリース	機能情報
Cisco IOS XE Everest 16.5.1a	この機能が導入されました。

翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。